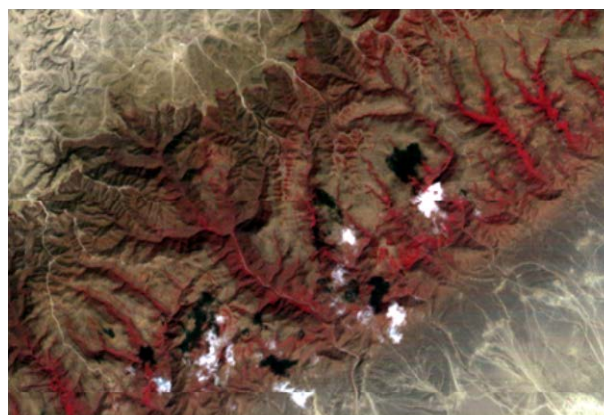


第3回：ジャバル（山岳）地域の牧畜

サララからすぐ北のジャバルと呼ばれている山岳地帯では、昔から放牧による家畜飼育が盛んである。ドファール州のジャバルのうちモンスーンの影響でかなりの自然植生が見られるのは、およそ南北 20km 弱、東西 80km 程度で、この地域で放牧が行われている。家畜の中心は食肉用及びミルク生産用の牛で、ほとんどの農家で飼育している。また、3割の農家でラクダ、2割の農家でヤギを飼育している。このうち牛が特に重要で、家長の手により大切に飼育され、餌も牧草、配合飼料、干し魚などが与えられ、自分の子供以上に大切にされている、ともいわれている。一方、家畜としての重要性が薄れつつあるラクダの飼育も家長の仕事ではあるが、その仕量は牛と比べて少なく、餌は放牧での不足分を与える程度である。食肉、ミルク用としてのヤギの飼育は主に子供と女の仕事で、ほとんど放牧により飼育されている。各農家は畜舎と母屋を兼ねた家に住み、家の回りに柵で囲んだ家畜用保護地を持っており、子牛などを入れている。



ジャバルの衛星写真(1994年11月):
濃い赤は天然林、薄い赤は草原状の地域

これらの家畜は主に山岳の自然植生を基本にした放牧が行われてきたが、餌が不足する時期には近隣地域（主に放牧地を中心として南北に移動）へ餌を求め、家畜を移動させている。現在では人間が与える飼料の増加から、この伝統的放牧も薄れてきたと言われているが、それでも緑の多くなるモンスーン時期のサララ市近郊では多くの家畜（特にラクダ）が山から下りてきているのを見る。牧畜以外の農産物では、乳香、蜂蜜が有名で非常に高価である。モンスーンの時期にはローカルのキュウリ、キノコなどが市場に出てくる。また、農産物ではないが牛糞を堆肥化したコンポストも重要な収入源である。（乳香については AAINews 第 2 号参照）。

これらの家畜は主に山岳の自然植生を基本にした放牧が行われてきたが、餌が不足する時期には近隣地域（主に放牧地を中心として南北に移動）へ餌を求め、家畜を移動させている。現在では人間が与える飼料の増加から、この伝統的放牧も薄れてきたと言われているが、それでも緑の多くなるモンスーン時期のサララ市近郊では多くの家畜（特にラクダ）が山から下りてきているのを見る。牧畜以外の農産物では、乳香、蜂蜜が有名で非常に高価である。モンスーンの時期にはローカルのキュウリ、キノコなどが市場に出てくる。また、農産物ではないが牛糞を堆肥化したコンポストも重要な収入源である。（乳香については AAINews 第 2 号参照）。

1994 年の資料によると、家畜数は牛が 8,400 頭、ラクダが 2,000 頭、ヤギが 1,900 頭と報告されているが、その後かなり家畜頭数は増加していると考えられている。住民にとって家畜は単なる現金収入源と言うより、財産としてどんどん増やしている。しかし、現在の家畜の頭数は、明らかに自然の牧草生産能力を越えている。これは、家畜の放牧による自然植生の後退が急激に進んでいることから明らかである。住民の話では、20 年ぐらい前まではジャバルは深い森林と草原に被われ、道を外れるとどこにいるかわからなくなったと言う。農家、農業関係機関も過放牧の実体は十分認めているものの、適切な対応策が取られている形跡はない。ただ、森林局が一部で植生回復のための植林や、種子生産用区域保護を小規模ながら行っている。



雨期の状況:草で一面覆われている。



乾期の状況:雨季に草原だった場所でも乾期はほとんど地面が露出してしまふ。